

SFCが見える

100人の研究者

no. 1

2014.
March

その「はい」は、「NEIN」かもしれない。
言語の外側にあるコミュニケーションを求めて。



白井宏美

視線や表情で言葉の意味はガラリと変化する。
微妙なニュアンスの移ろいを調べ上げたい。



これまでのキャリアを教えてください。

学部時代は心理学を学んでいましたが、大学院からドイツ語を専門とするようになり、ドイツ語学やドイツ語教育などに取り組んできました。その中で次第に言語だけではなく、会話環境を踏まえた研究に対象を広げていくようになりました。

例えば、「ありがとう」という言葉。辞書を開けば、お礼として使うとありますが、相手との関係性により異なる意味に発展することもあり、ときには感謝とはまるで反対の批判や嫌味の言葉となる場合も想定されます。そこで、現実 に即したコミュニケーションを見ていくために、言語以外にも表情なども含めて調査してきました。ドイツ語はもちろん、日本語においても同様の調査を行うことで、両者の言語の違いを浮き彫りにするのも一つの目的としています。



ドイツのハノーファー大学で指導教授らと議論

具体的にはどのような形で
研究を進めていますか？

以前は会話の様子を録画して、言語行動を
中心に分析していましたが、現在はそこから



対面コミュニケーション上のトラブルがどのように示されるのかについて、マルチモーダルに分析するためのデータ

発展して「マルチモーダル分析」に取り組んでいます。複数のモダリティ——言語に関する表現を合わせて分析していく手法であり、相槌だけではなく、身振り手振り、視線の置き方、微笑みなどの表情を細かく捉えていくことで、会話の意味を浮き彫りにしようとしています。4台のカメラで撮影をして、各映像を同期させようとて話者の視線や仕草、表情などを一つひとつチェックしていくので、分析に時間がかかる難しさはありますが、丹念に調査することでいくつもの特色が見えてきました。

例えば、首を縦に振って「はい」と言っている、でも、視線を外に向けたり、微笑みも携えていると、相手を理解する上のトラブルが起こっていることがあります。特に専門家と素人と、いった知識量に差がある間柄に発生しやすい現象です。

応用する用途としては、
どのような分野を想定していますか？

大学教授などの専門家が一般に向けて発

信する際の一助になると思っています。また、個人的には茶道、邦楽、文楽といった日本の伝統文化・芸能や、職人的な技術の伝承に活用していく方向も想定しています。いわゆる親方と弟子という関係性の中では“背中を見て盗む”というコミュニケーションが主体でした。しかし、専門家である親方にとっては当たり前でも、素人に近い弟子にとっては理解できないことが多々あるため、そのギャップを埋めるのに時間がかかっていた側面がありました。私たちの研究でコミュニケーションの形をより良い方向に進められたら幸いです。

日独の両方の言語でまったく同じ実験をしていることから、両国の差異も見えてきました。実際、ドイツ人は、最初目を丸くし、次第に吹き出すなどして、時を追うごとに段階的に「わからない」を表現します。それに対して日本人は表情こそあまり変わりませんが、ときおり視線を外すなどして自分の意志をほのめかします。さらに分析を進めていけば、日本的なコミュニケーションの細やかさをまとめ上げることも十分に可能。日本人の「おもてなし」のスキルやストラテジーをわかりやすい形にまとめることで、他国のビジネスやサービスの発展に貢献したいとも考えています。



NHKラジオ「まいにちドイツ語 入門編」テキスト含む、白井准教授の著書

白井宏美 Hiromi Shirai

総合政策学部准教授。2008年、ハノーファー大学で文学博士となる。2012年にはNHKラジオの「まいにちドイツ語 入門編」の講師を務める。この番組は、好評につき2014年10月より再放送される。チャットやツイッターでのコミュニケーションの日独比較などにも取り組んでいる。また、研究室ではテレビ番組やタレントの会話を分析するなどの試みも展開中。

内容に関する問い合わせ先
慶應義塾大学湘南藤沢研究支援センター
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel 0466-49-3436
info-kri@sfc.keio.ac.jp